

文語の苑

メールマガジン第九号（平成二十四年三月）

日本語による経済協力

私は現役時代について返す返すも残念な思いが一つある。ただ当時は全く思い至らぬことであったので、今更悔やんでも詮方ないことである。

現在でもそうであるが、わが国の経済協力は英語で為されている。書類は英語で処理されるし、相手国の担当者との会話も英語で行われる。私自身もこの事に関し不思議に思ったことはなかった。

経済協力に限らず、民間でも海外事業では主として英語が使われている。退官してから勤めたソニーでは特にそうであった。例えばソニーのインドネシアの工場の総務課の女性は筑波大学に留学し学位まで取ったが、現場では英語を使わされ、折角学んだ日本語を使う機会は全くなかった。

仕事上しばしばバンコックを訪れ、その興銀の支店長と仲良くしていたが、ある時こんなことがあった。本社の頭取がバンコックを訪れることになり、現地経済人と会談をした。い、ついては日タイの通訳を用意せよと指示して来たのである。支店長は慌てた。普段仕事は英語でして居るので、通訳など使ったことがない。どうしたら良いか途方に呉れていたところ秘書が自分が通訳をやっても良いと申し出たのである。それまで秘書とはもっぱら英語で話して来たので日本語が話せるとは露知らなかったとのこと、笑い話にもならない。

海外での意思疎通を英語に頼ることは大きく言って二つ問題がある。

一つは効率の問題である。人材の評価は何語で行うかによって大きく異なる。Aさんの評価は日本語では100であっても、英語だと割引して60、50となると言ったようなことはよくある。アフリカのジャングルの中のインシュタインはほとんど無価値である。人材の評価は外国語による場合割掛けしなければならぬ。先のインドネシアの例で言えば、現場の日本人の英語は決してレベルは高くない。"Do this, do that." などとやって来た。他方インドネシアの現地人の英語は普通もつとレベルが低い。それぞれの言語効率の係数を掛け合わせると、例えば0.5x0.3=0.15というふうに極端に悪くなってしまう。これに対し通訳を介せば多少時間は掛かるが、まっとうな意思疎通が可能となる。インドネシアの場合現場のコミュニケーションの劣悪なことが深刻な労働争議を引き起こす結果となった。

もう一つの問題は日本に留学した外国人の就職の問題である。彼らが勉強した日本語を活用することをしないから、彼らの青春の貴重な一時期を全く無駄にしてしまっている。彼らの人生設計について日本は全く無責任であった。タイの日本留學生の場合、日本で留学した後改めて米国やドイツに留学しなおしている人達が多かった。

日本人は外国語を話すことの不得意なこと天下一品である。しかも外国人が日本語を習得するのも同じく至難の業と決め込んでいる。実際はそうではない。彼らは十分な時間と優れた授業があれば容易に日本語をものにするのである。

日タイ経済協力協会の理事長のときバンコックで開かれたアジアの元日本留學生の日本語による討論会に出席する機会があった。日本語による国際会議の初の経験であったが、強烈な印象を受けた。高度な内容の議論であるにもかかわらず、日本語は流暢で、なおかつ、論理的で遠慮がないから日本人の場合見られないような白熱したものとなった。日本語は国際語として一級であるとその時思った。

日本は発展途上国の援助に莫大な金を費った。しかし経済が低迷して金が続かなくなるとそれで縁が切れてしまうのである。もし経済協力が日本語で行われ、日本に留学した現地人がその実務で活躍していたなら、今頃大きな遺産が残ったに違いない。冒頭に述べた悔やまれることとはその事である。

愛甲次郎

文語の苑

メールマガジン第九号

小倉百人一首 九 蝉丸

これやこの行くも帰るもわかれては 知るも知らぬも逢坂の関

京都府と滋賀県の境にある逢坂山は、今はその下に掘られた逢坂山トンネルを、東海道線が通つてゐ（い）ます。しかし大化の世とも伝へ（え）られる遠い昔に、山の上の峠に関所が設けられ、京から東国へ向ひ（い）、あるひ（い）は東国から都に上る人たちが、通つて行きました。

京から東に行く人は、必ずこの関所を通らなければならない。関所を越せば、そこは近江の国です。そのことから平安時代の人たちは、次のや（よ）うな連想をしました。

当時逢坂山の「逢」の漢字を使った「逢ふ（う）」といふ（う）言葉には、男女が深い関係になる意味がありました。もっともこの頃は現代のや（よ）うに、身分に大きな違ひ（い）の無い男女が、何の事なく会つて言葉を交は（わ）すことは、ほとんどなかったので、当時の男女の「逢ふ（う）」を、特別の意味に解する必要はないのかも知れません。何れにしてもこの「逢」の字を使った「逢坂の関を越える」とは、男女が深い関係になることを意味し、その結果男と女は、近江（あふみ）、つまり「逢ふ（う）身」になるとの連想が働（く）や（よ）うになりました。もちろんこの蝉丸の歌には、そんな連想はありませんが、逢坂の関は、それほど当時の都の人にとつて、身近な場所でした。この歌は、逢坂の関に、東から西から、大勢の人が集まつて右往左往する賑やかな場（ま）景（けい）を、歌つた歌です。

歌は次のや（よ）うな構造になつてお（を）ります。

これやこの 行く（人）も帰る（人）もわかれては

知る（人）も知らぬ（人）も

（逢ふ）逢坂の関

作者蝉丸は、伝説中の人物です。百人一首の読み札では、僧なのに頭にかぶりものをした異形の絵姿で表されます。蝉丸は醍醐天皇の御代、遙かな西の国では大唐帝国が滅亡し、唐の漢詩漢文に熟達した菅原道真が、京の政治から退けられ、最初の和歌の勅撰集、古今集が編纂された時代、つまり日本古来の和歌が漢詩や漢文に代つて息を吹返した時代に、生きた人のや（よ）うです。身分の低い盲目の隠者で、逢坂の関の近くに庵を結び、琵琶の名人だったと伝へ（え）られます。

今も逢坂山のあたりは、人通りや車通りの激しい場所となつてゐ（い）るさ（そ）うです。山の上と麓には、蝉丸神社が建つてゐ（い）ると言ひ（い）ますから、蝉丸はこの関の守護神のや（よ）うな存在なのでせ（し）ょ（う）。平安時代から時が経つにつれて、いつか蝉丸の身分も上り、平家物語や能では、醍醐天皇の皇子とされてを（お）ります。

蝉丸の霊はいまも、どこか昔の関所のあたりの中空に漂つて、無数の人や車が、行く人も帰る人も、知る人も知らぬ人も、慌ただしく行交ふ（う）さまを眺めながら、朗々とこの歌を口誦（く）んでゐ（い）るかも知れません。

文語の苑

メールマガジン第九号

文語歌曲「春のやよひ」(明治小學唱歌)

花

春のやよひのあけぼのに 四方の山べを見渡せば

花盛りかも白雲の かからぬ峯こそ無かりけれ

郭公(ほととぎす)

花たちばなもにほふなり 軒のあやめも薫るなり

夕ぐれさまの五月雨に 山ほととぎす名のりして

月

秋のはじめになりぬれば 今年のなかばは過ぎにけり

我がよふけゆく月影の かたぶく見るこそあはれなれ

雪

冬の夜さむの朝ぼらけ 契りし山路に雪深し

心の跡はつかねども 思ひやるこそあはれなれ

花、郭公(鳥)、月、雪といふ題名から、これが「花鳥風月」や「雪月花」といつた日本の美しい自然を示す熟語を聯想させ、それを四季に對應させてゐることに氣付かされます。作者は平安末期から鎌倉初期にかけて、比叡山を本據とする天台宗の座主をつとめた慈圓といふお坊さんです。太政大臣にもなつた藤原兼實の弟で、歌人としても名を知られてゐます。思付くままに直ぐに歌を詠む修練をした人なのでたくさん和歌を詠みましたが、新古今和歌集に西行に次いで入集してゐるのは、選ばれるに足る水準だつたからでせう。その個人歌集『拾玉集』の中にあるのがこの歌で、指折り數へればわかるやうに、七五七五七七五で一まとまりとなつてゐます。これは今様といはれる歌の形式の一つで、平氏や源氏を手玉に取つた後白河法皇が殊の外愛好しました。法皇はこともあらうに、遊女達が口ずさんでゐたこの今様に若いときから馴染み、竟には収集編纂して『梁塵秘抄』(りやうぢんひせう)といふ本に仕立てました。その中でも「遊びをせんとや生れけむ、戯れせんとや生れけん、遊ぶ子供の声きけば、我が身さへこそ動がるれ」は、現在でもかなり多くの人に愛唱されてゐるやうです。下賤の者達がうたつた流行歌といふべきこの今様を、當時天台宗の最高位にゐた座主が作つたとは意外でせうが、慈圓は『越天樂』といふ雅樂の平調のメロディーにあはせて歌詞をつけたともされてゐます。そのため越天樂今様を現代風に編曲した「黒田節」と同じ節廻しで歌ふことができます。

『日本の唱歌上』(講談社文庫)によると、明治時代の一高に、柔弱だと唱歌を嫌つてゐた體育教官が、生徒を引率して行軍をしたところ、歸路疲労困憊した生徒達が誰からもなくこの「春のやよひ」を歌ひ出したら元氣を取戻して歸着できたことから、唱歌嫌ひを詫びたとあります。この歌が行軍といふ集團行動に向いたとは慈圓もおどろきでせう。

谷田貝常夫

文語の苑

メールマガジン第九号

思ひきや憂き身ながらにめぐり来て同じ雲居の月を見むとは

（近衛太皇太后宮・藤原多子）

多子は徳大寺公能の女なり。生母豪子は俊成の姉なれば、多子は則ち定家の従姉、歌才に恵まれたるも異とするに足らず。

容色、當代に無雙なるを以て、久安六年（一一五〇）近衛天皇に入内せんとす。徳大寺家は清華の家柄なれど、今、父の妹は攝家の頼長に嫁ぎてあり。頼長、多子を養女に採りて、然る後に入内せしむ。ただちに皇后に册立、従三位に叙せらる。時に主上實算十一、多子は十一歳なりき。頼長の兄、忠通にもまた養女ありて、呈子といふ。芳紀二十一にして、皇后の位を多子と争ふに至る。やがて、一條天皇の二帝二后の鬢に倣ひ、多子は皇后、呈子は中宮とて並立せらる。兄弟の父忠實は頼長に加擔し、是に於て、忠實と忠通は、俱に天を戴かざるの父子となる。

五年の後、天皇崩御し給ひ、翌年皇太后の稱號を賜る。この年、保元の亂勃發し、頼長暗に神鏡に中りて薨去せるも、公能は既に頼長と訣別し、かつまた多子の姉忻子は後白河院の寵を受けてあり。これが爲に、徳大寺家は安泰なりき。

この年、保元三年（一一五六）、多子は十七歳にして太皇太后に進む。

平治元年（一一五九）、平治の亂の後、椿事出来せり。九重には、前年、二條天皇の踐祚ありけるが、多子の艶麗類なき由天聽に達し、その入内のことを圖らせたまふ。

天子の后となりたる女人の、後の天子の後宮に入りたる例は古今にこれあらざるなり。思ひの外の敕諭、何爲承け奉りて人倫に悖るの道に墜つべけんや。然れども、綸言汗の如くにして、つひに違背するを得ず。

治天の君たる後白河院の訓戒せさせ給ふも、「天子に父母なし」と仰せ出だされ、俄に宣旨を發して、入内を強ひ給ふ。

時に、帝十七歳、多子二十歳。

程經ずして、父公能右大臣に任せらる。

この歌は、多子、二條天皇の宮中に入りて後に詠みたるなり。平家物語に收められ、正和元年（一一三二）、十三代集の第六なる玉葉和歌集に入集せり。

玉葉和歌集には左の如くあり。

二條院御時さらに入内侍りけるに、月あかりける夜おぼしいづることありて、

近衛皇太后宮

知らざりき憂き身ながらにめぐりきて同じ雲居の月を見むとは

平家物語は「思ひきや」なれども、「玉葉集」に撰びたるとき、初句を「知らざりき」に變ふることあり。「思ひきや」の人口に膾炙したるを以て、また、口調優れたるを以て、今冒頭に掲げたり。

嘆きつつ入内したる多子なれど、帝の寵濃やかかりけるを以て、慰めらるること多かりき。然るに、鴛鴦の睦み僅々六年、二條帝二十三歳にして崩御し給ふ。

なほ、帝は世に名高き美男にておはしましけり。

多子は落飾して兩帝の後世を弔ひ、六十三歳にして鬼籍に入る。時既に鎌倉の世、建仁二年（一一二二）のことなりき。

文語の苑

メールマガジン第九号

吾が昭和の豊けき青春（一）

昭和二十一年八月二日、福井縣武生市にて男六人女一人の七人兄弟の五男として出生す。明治三十年生れの父は、佛師を生業とし近在の社寺或は富裕家からの注文により彩色又は木地の儘の佛像・神像を制作す。大東亞戦前、父少壯の折には好景氣にて注文仕事多く比較的裕福なりしが、戦後は主たる注文主たる農家の疲弊せるが故が大仕事は殆ど無き有様にて、七人の子供養育の爲雑多なる端た金の手間仕事に追はれたり。

然るに「高度成長時代への突入」と軌を一にして、父に大チャンスが到来せり。天台宗中興の祖の一人なる眞盛上人（圓戒國師）の等身大彩色坐像を比叡山延曆寺に納入するの注文舞込めり。齋戒沐浴し尊像彫琢に打込みし父の姿は鬼氣迫り氣高くさへありし。吾人亡き父を誇りとせる由縁なり。

昭和三十四年秋、門徒衆多數を共に武生の眞盛宗本山引接寺を輿にて出立せしご上人像は、北陸街道を徒歩にて上り、琵琶湖南畔坂本より更に衆徒の手により比叡山上に到達せり。父・雅雲の絶頂の日なりき（號なる雅雲の雲は彼が尊敬せし高村光雲より採りしものとぞ聞く。尋常小卒後の指物屋の丁稚生活に飽足らず光雲に弟子入りせんと家出せしも壯圖成らず横濱驛にて保護せらると聞く）。

吾人年中行事として正月に比叡山登山を成す。延曆寺根本中堂上手なる大講堂に同寺にて修行なされし名僧の像を安置し、其の右より二番目に吾が「眞盛上人」坐しませり。その御尊顔は吾が父のかんばせなり。吾人、ご上人に對面し前の年の報告と今年の願ひを祈る。

吾が生地の武生は、古へ越前の國府が置かれ、北陸街道の要衝の地にして物産の集散地として榮えし商都なりと聞けども、當今の有様は他の地に異ならず往年繁華の街並は駐車場とシャッターのみ目立ち、更に一昨年流行の市町村合併を斷行し二千年來の武生の名を越前市と替ふるに至り、當に「昔の姿無かりけり」の慘状をなす。

昭和四十年春、福井市なる藤島高校（舊制福井中學、ノーベル賞の南部陽一郎氏の出身校として一時世の耳目を集む）卒業後東京大學に入學し、學内の駒場寮にて新生活を始め。既にして大學構内は學生運動喧しくなりつつありき。第一次安保の騒動より十年を経て學内漸く靜謐を取戻せし折柄、此頃進められし日韓條約締結交渉が學生運動のテーマとして浮揚し、學内立看と擴聲器のアジ演説溢れ、次第に落著きを缺く殺伐の雰圍氣日常化するに至れり。